

「聖書協会共同訳」はどんな翻訳聖書？

—ヨブ記など事例の紹介—

新翻訳事業翻訳者兼編集委員 小友聡

1. はじめに

今日、お集りの皆さんは、間もなく刊行予定の翻訳聖書「聖書協会共同訳」がどんな聖書なのか、詳しい話をぜひ聞きたいという思いでお出でになっておられます。その皆さんの期待にどれだけ応えられるかわかりませんが、私は編集委員の一人として、現時点でのホットな情報をお伝えするとともに、この翻訳聖書の意義と魅力について力を込めてお話をさせていただきたいと思います。私は、旧約聖書の詩文学の編集を担当しておりますので、具体的な翻訳の事例紹介については詩文学の一部に限られることをあらかじめご了承ください。

2. なぜ、今か

皆さん、ご承知の通り、日本聖書協会は今年12月（正確には11月末）に新しい翻訳聖書を刊行します。正式名称は「聖書協会共同訳」です。今日は4月9日ですから、あと8か月足らず。発行までいわば秒読みができるほど、すぐそこまで来ています。すでに校正が始まっている時期だと申し上げます。これまで私たちは新共同訳聖書を教会で、キリスト教学校で、また家庭で読み、これに親しんできましたが、まったく新しい次世代の翻訳聖書が間もなく登場いたします。

新しい翻訳聖書がなぜ今、必要なのか、という声があったところから聞こえて来ます。せっかく新共同訳聖書が定着し、この聖書に親しみ、この聖書で十分なのに、どうして新しい聖書が必要なのかという問いです。教会が混乱するのではないか、聖書はいつでも慣れ親しんだ同じ言葉であってほしい、という声も聞こえます。けれども、皆さんにまず日本の聖書翻訳の歴史を知ってほしいのです。

日本聖書協会は設立以来4種類の邦訳聖書を刊行しました。明治元訳（1887年）、大正改訳（1917年）、口語訳（1955年）、そして新共同訳（1987年）です。ほぼ30年おきに聖書が改訂/翻訳されてきました。それぞれの聖書がその時代の日本のキリスト教文化を担い、その形成に大きく貢献をしてきました。しかし、4つ目の新共同訳聖書からすでに30年が経過しているということに皆さんお気づきでしょうか。この間に聖書学的知見が変化しました。聖書学という学問の上で、30年前の常識は通用しなくなっています。たとえば、コヘレトの言葉。新共同訳聖書で初めて小見出しが付けられましたが、小見出しは「コヘレトの言葉」には一つもありません。30年前は、この書は錯綜した思想の文書という学問的認識があったからです。けれども、現在は、そのようには理解されていません。この書にもきちんとした思想と神学があることが認められるようになったからです。その学問的知見は当然、翻訳にも反映されます。

30年の変化は、聖書解釈の知見だけでなく、日本語にも見られます。30年でどれほど変わるだろうかと疑念を持つ人がいるかも知れませんが、一世代変わると、日常的に用いられる日本語のニュアンスが違ってきますし、また古い言葉が次第に使われなくなります。たとえば、「嗣業」という言葉。私の世代では常識的な聖書用語ですが、この言葉は現在、社会一般には使われず、学校教育で用いられる漢字でもありません。私も原典翻訳者の一人として、この「嗣業」にはこだわり、なくすることに反対しました。けれども、「嗣業」では中学生や高校生には何のことかわからないのです。聖書の専門用語だからと開き直るのではなく、この言葉をどう分かりやすい日本語にするかが大切な課題になります（新訳では、「受け継ぐべきもの」を訳語としています）。聖書は決してクリスチャンだけのものではありません。まだ聖書を知らない、この国のたくさんの人々にぜひとも読んでもらいたいのです。聖書の言葉はその時代にふさわしい言葉で的確に表現され、とりわけ若い人たちにきちんと届く言葉で書かれなければなりません。年配者には理解できても、若い人たちに伝わらなければ、聖書は敬遠され、図書館に埋没する古典文書の類になってしまいます。聖書は生きた命の言葉です。今の時代に最も受け入れられる日本語で訳された聖書が必要とされます。新しい翻訳聖書は次の時代に私たちが遺せる最大の福音伝道の手段でもあるのです。

3. 新共同訳聖書の課題を超えて

さて、現在私たちが使用している「新共同訳聖書」について、その特徴を確認しておきます。新共同訳はカトリックとプロテスタント両教会の礼拝で用いられる最初の日本語訳聖書です。正真正銘の原典訳聖書で、旧約は *Biblia Hebraica Stuttgartensia* を底本としました。ちなみに、口語訳聖書は戦後に翻訳されましたが、原典からの直接の翻訳ではなく、英語の RSV (改定標準訳) を基調としています。新共同訳の翻訳作業は 1968 年に始まり、46 名の翻訳者が携わりました。1987 年の刊行までに 18 年もの年月を要しました。

けれども、皆さんはご承知でしょうか。新共同訳聖書発行には前史があり、まず 1978 年に「共同訳新約聖書」が出版されたのです。この「共同訳」に取り入れられた翻訳理論が *dynamic equivalence* (動的等価) と呼ばれるものでした。原語の意味をきちんと捉えて、それを動的に、ダイナミックに翻訳するという訳法です。つまり、直訳ではなく、意識的な訳法を取り入れたのです。その後、「新共同訳」へと転換がなされ、訳法も意識的翻訳から字義的翻訳 (*formal correspondence*) に移行しました。にもかかわらず、完成した「新共同訳」(旧約) には当初の翻訳理論の残滓がいたるところに見られます。聖書翻訳は訳法を変更したからといって、即座に徹底はできません。それは特に詩文学に顕著です。原語の意味をきちんと踏まえて、それを動的に翻訳する訳法により、意味がよく分かり、読みやすいのは確かです。けれども、意味がよく分かるということは必ずしも原典に忠実であるということではありません。分かりやすくするために、もともとない言葉を補ったり、そのまま直訳しても十分に意味が通るにもかかわらず、不必要に説明を加えるという箇所が散見されます。原典に忠実かどうかについて疑問な箇所もあります。たとえば、ダニエル書 11 章 1 節です。

ダニエル 11:1

「彼はわたしを支え、力づけてくれる。」(新共同訳)

「わたしはまたメディアびとダリヨスの元年に立って彼を強め、彼を力づけたことがあります。」(口語訳)

新共同訳と口語訳を比べると、訳し方がずいぶん異なることに気づかされます。ヘブライ語原典に忠実なのは口語訳の方で、新共同訳は恣意的な省略と読み替えをしています。原典通り「メディアびとダリヨスの元年」だとすると、9 章 1 節とまったく同じ時代になってしまうために、新共同訳は矛盾を避けたかったのでしょう。それによって、読者である私たちは混乱せずにすんなり読むことができます。けれども、原典に忠実に訳すという原則は破棄されます。これも訳法のぶれの一つと言えるでしょう。

4. 「聖書協会共同訳」の特徴

新しい翻訳聖書「聖書協会共同訳」は、このような新共同訳の課題をきちんと把握した上で、原典の息吹をふさわしい日本語で表現することを目指しています。これはスコポス理論を踏まえています。30 年前に新共同訳がひとたび開いた道を進んで、最新の学問的知見を踏まえ、訳文をできるだけ原典に近付けるという方向です。もちろん、教会の礼拝で使用されることを第一の目的としています。2009 年にこの新しい聖書翻訳事業の目的として挙げられた指針をあらためて紹介します。

- (1) 共同訳事業の延長とし、日本の教会の標準訳聖書となること、また、すべてのキリスト教会での使用を目指す。
- (2) 礼拝で用いることを主要な目的とする。そのため、礼拝での朗読にふさわしい、格調高く美しい日本語訳を目指す。
- (3) 義務教育を終了した日本語能力を持つ人を対象とする。
- (4) 言語と文化の変化に対応し、将来にわたって日本語、日本文化の形成に貢献できることを目指す。
- (5) この数十年における聖書学、翻訳学などの成果に基づき、原典に忠実な翻訳を目指す。底本として、旧約 (BHQ)・新約 (UBS 第 5 版)・旧約続編 (ゲッティンゲン版) など、最新の校訂本をできる限り使用する。
- (6) 文学類型の違いを訳出して原典の持つ力強さを伝達する努力はするが、聖書が神の言葉であることをわきまえ、統一性を保つ視点を失わないこととする。固有名詞や重要な神学用語については『新共同訳』のみならず、過去の諸翻訳も参考にして、最も適切な訳語を得るようにつとめる。
- (7) その出版に際して、異読、ならびに地理や文化背景などを説明する注、引照聖句、重要語句を解説す

る巻末解説、小見出し、章節、地図や年表、などの本文以外の部分は、できる限り様々な組み合わせを考え、読者のニーズに応える努力をする。

この新しい翻訳事業は2010年に始まり、61名の翻訳者（プロテスタントの翻訳者61%）を含む150名余の委員が携わっています。原語担当者は日本語担当者と二人三脚で翻訳文を何度も何度も練り直し、朗読チェックで読みやすい日本語に整え、さらに外部モニターの意見も取り入れ、検討に検討を重ねて最終的な翻訳文になりました。日本の諸教会に信頼される最高の翻訳聖書とするために、翻訳には膨大な時間と労力が費やされました。翻訳作業はすでに終了し、刊行の 때가すぐそこまで来ています。

5. 「聖書協会共同訳」の紹介

それでは、新しい翻訳聖書の一部を紹介し、新共同訳との違いを見てみましょう。ヨブ記から2か所、コヘレトの言葉と雅歌からそれぞれ1か所を紹介いたします。

(1) ヨブ記2章3-10節

<新共同訳>

3. 主はサタンに言われた。

「お前は私の僕ヨブに気づいたか。地上に彼ほどの者はいまい。無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きている。お前は理由もなく、わたしを唆して彼を破滅させようとしたが、彼はどこまでも無垢だ。」

4. サタンは答えた。

「皮には皮を、と申します。まして命のためには全財産を差し出すものです。」

5. 手を伸ばして彼の骨と肉に触れてごらんください。面と向かってあなたを呪うにちがひありません。」

6. 主はサタンに言われた。

「それでは、彼をお前のいいようにするがよい。ただし、命だけは奪うな。」

7. サタンは主の前から出て行った。サタンはヨブに手を下し、頭のとっぺんから足の裏までひどい皮膚病にかからせた。

8. ヨブは灰の中に座り、素焼きのかけらで体中をかきむしった。

9. 彼の妻は、

「どこまでも無垢でいるのですか。神を呪って、死ぬ方がましでしょう」と言ったが、

10. ヨブは答えた。

「お前まで愚かなことを言うのか。わたしたちは、神から幸福をいただいたのだから、不幸をもいただくのではないか。」

このようになって、彼は唇をもって罪を犯すことをしなかった。

<聖書協会共同訳>

3. 主はサタンに言われた。

「あなたは私の僕ヨブに心を留めたか。地上には彼ほど完全で、正しく、神を畏れ、悪を遠ざけている者はいない。あなたは私を唆し、理由なく彼を滅ぼそうとしたが、彼はなお完全であり続けている。」

4. サタンは主に答えた。

「皮には皮を、と言います。人は自分の命のためには、すべてを差し出します。」

5. しかし、あなたの手を伸べて、彼の骨と肉を打ってごらんください。彼は必ずや面と向かって、あなたを呪うに違いありません。」

6. 主はサタンに言われた。

「では、あなたの手に委ねる。ただし、彼の命は守れ。」

7. サタンは主の前から出て行き、ヨブの足の裏から頭の頂まで、悪性の腫れ物で彼を打った。

8. ヨブは土器のかけらを取って体をかきむしり、灰の中に座った。

9. 彼の妻は言った。

「あなたは、まだ完全であり続けるのですか。神を呪って死んでしまいなさい。」

10. しかし、ヨブは彼女に言った。

「あなたは愚かな者が言うようなことを言う。私たちは神から幸いを受けるのだから、災いをも受けようではないか。」

このような時でも、ヨブはその唇によって罪を犯さなかった。

このヨブ記 2 章は、天上で神とサタンが言葉を交わし、地上のヨブに災いが下る場面です。ここには非常に張り詰めた雰囲気があります。神がサタンを呼ぶ際の「お前」（新共同訳）という言い方は、上下関係を前提としたきつい表現のため、これを避け、新訳では「あなた」としました。3 節と 9 節でヨブについて「無垢な」という訳語が新共同訳で用いられますが、この形容詞タームは「完全な」という意味で、ヨブ記ではヨブの本質を示すキーワードです。新訳では「完全な」という訳語で統一されています。また、新共同訳で「触れる」と訳される 5 節のナガアは本来的には「打つ」という意味です。5 節の提案の成就である 7 節において、新共同訳「皮膚病にかからせた」は意識であり、新訳では原文に即して「腫れ物で彼を打った」と訳されます（新改訳 2017 も同様）。意識という点では、6 節の新共同訳「彼をお前のいいようにするがよい」、「命だけは奪うな」もまたそうです。新訳では、原文の息吹を尊重して「あなたの手委ねる」、「彼の命は守れ」と訳されています。この箇所では、9 節でヨブの妻が語った言葉が波紋を生じさせます。新共同訳「神を呪って、死ぬ方がましでしょう」は、新訳では「神を呪って死んでしまいなさい」と訳されます。この「呪って」は、原文では実は「祝福して」です。不思議なことに真逆の言葉で表現されているのです。5 節の「呪う」も同様で、原文は「祝福する」です。これは意図的な婉曲表現と説明できますが、両義的とも言えます。そこで、新訳では 5 節「呪う」と 9 節の「呪って」については注を付け、脚注で「直訳「祝福する」」、「直訳「祝福して」」と説明しました。新共同訳と比べて、聖書協会共同訳では原文の息吹をきちんと伝える工夫がされています。訳文もより引き締まったものになっています。

（2）ヨブ記 19 章 21-27 節

<新共同訳>

21. 憐れんでくれ、わたしを憐れんでくれ
神の手がわたしに触れたのだ。
あなたたちはわたしの友ではないか。
22. なぜ、あなたたちまで神と一緒にあって
わたしを追い詰めるのか。
肉を打つだけでは足りないのか。
23. どうか
わたしの言葉が書き留められるように
碑文として刻まれるように
24. たがねで岩に刻まれ、鉛で黒々と記され
いつまでも残るように。
25. わたしは知っている
わたしを贖う方は生きておられ
ついには塵の上に立たれるであろう。
26. この皮膚が損なわれようとも
この身をもって
わたしは神を仰ぎ見るであろう。
27. このわたしが仰ぎ見る
ほかならぬこの目で見ると。
腹の底から焦がれ、はらわたは絶え入る。

<聖書協会共同訳>

21. あなたがた、友よ
私を憐れに思ってくれ、憐れに思ってくれ。
神の手が私を打ったのだから。

22. なぜあなたがたは神のように私を追い詰めるのか。

私の肉で飽き足らないのか。

23. どうか私の言葉が書き留められるように。

どうか碑文に刻まれるように。

24. 鉄の筆と鉛によって

永遠に岩に彫られるように。

25. 私は知っている。

私を贖う方は生きておられ

後の日に塵の上に立たれる。

26. 私の皮膚がこのように剥ぎ取られた後

私は肉を離れ、神を仰ぎ見る。

27. この私が仰ぎ見る。

ほかならぬ私の目で見ろ。

私のはらわたは私の内で焦がれる。

この箇所はヨブ記では最も有名なところですが、新訳はこれまでの新共同訳の訳文を尊重した上で、新たな判断をした訳文となっています。新共同訳よりも引き締まった文体と言ってよいでしょう。比較した場合に重要なことは、解釈上論争のある 26 節の「この身をもって」（新共同訳）を「私は肉を離れ」としたことです。口語訳に戻りました。文語訳以来、伝統的にそのように訳されてきました（岩波訳も「わが肉なしに」）。どちらの訳も可能ではありますが、ヨブの友人たちが肉にこだわっている以上、ここは 22 節の同一表現「私の肉で」とは区別され、「肉を離れ」と訳す方が適切です（新改訳 2017 は「肉から」）。もう一ヶ所、27 節の新共同訳の訳文「腹の底から焦がれ、はらわたは絶え入る」は、意識です。新訳が原典通りです。ただし、「焦がれる」と訳すべきか、「絶え入る」と訳すべきかで見解が分かれます。前者は肯定的な意味ですが、後者は否定的な意味になります。新共同訳は両方を取り入れる折衷的な意識！をしました。新訳は、「焦がれる」という肯定的な訳語を選びました（口語訳は「これを望んでこがれる」）。これについては、本文に注を付け、脚注に「別訳は「絶え入る」と記してあります。新しい翻訳は教会で安心して読んでいただけることを重要なことと考え、意識や付加的潤色（24 節の新共同訳「黒々と」は、原典にはない付加的潤色）を避けると同時に、わかりやすい翻訳をしています。

（3）コヘレトの言葉 11 章 1-10 節

<新共同訳>

1. あなたのパンを水に浮かべて流すがよい。

月日がたってから、それを見いだすだろう。

2. 七人と、八人とすら、分かち合っておけ

国にどのような災いが起こるか

わかったものではない。

3. 雨が雲に満ちれば、それは地に滴る。

南風に倒されても北風に倒されても

木はその倒れたところに横たわる。

4. 風向きを気にすれば種は蒔けない。

雲行きを気にすれば刈り入れはできない。

5. 妊婦の胎内で霊や骨組みがどの様になるのかも分からないのに、

すべてのことを成し遂げられる神の業が分かるわけではない。

6. 朝、種を蒔け、夜にも手を休めるな。

実を結ぶのはあれかこれか

それとも両方なのか、分からないのだから。

7. 光は快く、太陽を見るのは楽しい。
8. 長生きし、喜びに満ちているときにも
暗い日々も多くあろうことを忘れないように。
何が来ようとすべて空しい。
9. 若者よ、お前の若さを喜ぶがよい。
青年時代を楽しく過ごせ。
心にかなう道を、目に映るところに従って行け。
知っておくがよい
神はそれらすべてについて
お前を裁きの座に連れて行かれると。
10. 心から悩みを去り、肉体から苦しみを除け。
若さも青春も空しい。

<聖書協会共同訳>

1. あなたのパンを水面（みなも）に投げよ。
月日が過ぎれば、それを見いだすからである。
2. あなたの受け取り分を七つか八つに分けよ。
地にそのような災いが起こるか
あなたは知らないからである。
3. 雲が満ちれば、雨が地に降り注ぐ。
木が南に倒れても、北に倒れても
その倒れた場所に木は横たわる。
4. 風を見守る人は種を蒔けない。
雲を見る人は刈り入れができない。
5. あなたはどこに風の道があるかも知らず
妊婦の胎内で骨がどのようにできるかも
知らないのだから
すべてをなす神の業は知りえない。
6. 朝に種を蒔き
夕べに手を休めるな。
うまくいくのはあれなのか、これなのか
あるいは、そのいずれもなのか
あなたは知らないからである。

造り主を心に刻め

7. 光は快く、太陽を見るのは心地よい。
8. 人が多くの年月を生きるなら
これらすべてを喜ぶがよい。
しかし、闇の日が多いことも思い起こすがよい。
やって来るものはすべて空（くう）である。
9. 若者よ、あなたの若さを喜べ。
若き日にあなたの心を楽しませよ。
心に適（かな）う道を
あなたの目に映るとおりに歩め。
だが、これらすべてについて
神があなたを裁かれると知っておけ。

10. あなたの心から悩みを取り去り

あなたの体から痛みを取り除け。

若さも青春も空だからである。

新共同訳の訳文については、すでにこれに親しんできた私たちには説明は不要かも知れません。新共同訳は8節までを区切りと見て、また10節も区切りと見るようです。いずれの段落も「空しい」で終わるからです。「空しい」という厭世的な結論で終わるゆえに、1-8節も「分かったものではない」(2節)、「蒔けない」「できない」(4節)、「分からない」「分かるわけではない」(5節)、「分からないのだから」(6節)、という懐疑的表現が強調される訳し方がされています。確かに、1970年代までは、著者コヘレトは世をはかなむ厭世主義者で懐疑主義者と見なされ、「コヘレトの言葉」は支離滅裂な論調で書かれている、というような解釈がされていました。1987年出版の新共同訳もそういう方向で翻訳されています。7節の明るい表現も懐疑的な文脈の中に埋没してしまい、懐疑主義者コヘレトの姿が浮き彫りにされます。「コヘレトの言葉」全体が支離滅裂な格言の羅列と見なされ、小見出しも付けられないという判断がされたようです。実際また、私たちもそのように「コヘレトの言葉」を読んできました。けれども、現在では、「コヘレトの言葉」は一貫した思想的論調の書として解釈されるようになりました。新訳もその線で訳されます。訳文を比べるとおわかりになるはずです。

そこで、新訳をご覧ください。文節は1-6節、7-8節、9-10節と分かれます。7節の「光」「太陽」は12章2節と対応して囲い込み(インクルージオ)、11:7~12:2が一つの段落を構成します。この7節から段落が変わるので、「造り主を心に刻め」という小見出しをつけました。11:1-6を見てみましょう。この1-6節は一つの段落を構成します。新訳では、1-6節の否定的表現については、ヘブライ語の接続詞キーに注目し、きちんと「～からである」と訳されています。「知らない」(2節)、「知らない」(6節)はコヘレトの否定的な結論ではなくて、むしろ理由や根拠を説明しているのです。コヘレトの結論は「あなたの受け取り分を七つか八つに分けよ」(2節)、「朝に種を蒔き/夕べに手を休めるな」(6節)という命令です。地に災いが起こるかも知れないからこそ、受け取り分(神から与えられているもの)を皆で分け合いなさい。どの種が実を結ぶかわからないからこそ、朝から晩まで手を抜かず徹底して種を蒔きなさい、ということです。不可知性が逆に行動の根拠となるのです。コヘレトは懐疑主義者なのではなく、将来がどうなるかわからないからこそ、逆に、今、最善を尽くし、とことんまでやりなさい、と言っているわけです。コヘレトはすべてが「空しい」と考える厭世主義者では決してありません。ですから、ヘブライ語のヘベルは新共同訳のように「空しい」と訳されるより、口語訳のように「空」と訳される方がむしろ適切であって、新訳でもそう訳されています。コヘレトは現実主義者ですが、したたかで、終わりである死を前にしても前向きに考える傾向を持っています。それが、原典通りに新訳に反映され、11:7~12:2という次の段落からもそれを読み取ることができます。

さらに、新訳では注も付けられます。5節の「風」に注がついていて、脚注に「別訳で「霊」と記されます。新共同訳では「霊」と訳されていたからです。これは直前にある4節の「風」と同じヘブライ語ですから、「霊」よりも「風」と訳されるべきと判断されます。いずれにしても、新訳は新共同訳よりも、原典に即してコヘレトの言葉の重要なニュアンスをきちんと生かし、そこから意味を汲み取ることができるような翻訳がされていると思います。

(4) 雅歌3章1-4節

<新共同訳>

1. 夜ごと、ふしどに恋い慕う人を求めても
求めても、見つかりません。
2. 起き出して町をめぐる
通りや広場をめぐる
恋い慕う人を求めよう。

求めても、あの人は見つかりません。
3. わたしが町をめぐる夜警に見つかりました。
「わたしの恋い慕う人を見かけましたか。」

4. 彼らに別れるとすぐに

恋い慕う人が見つかりました。

つかまえました、もう離しません。

母の家に

わたしを産んだ母の部屋にお連れします。

<聖書協会共同訳>

1. 夜ごとに寝床で

私の魂の愛する人を探しました。

あの方を探しましたが、見つかりません。

2. 「さあ起き出して、

町を、通りや広場を巡りましょう。

私の魂の愛する人を探しましょう。」

私はあの方を探しましたが

見つかりません。

3. 町を巡る夜警たちが私を見つけました。

「わたしの魂の愛する人を

あなたがたは見かけましたか。」

4. 彼らに別れを告げるとすぐ

私の魂の愛する人は見つかりました。

この方を抱きしめました。もう放しません。

私の母の家に

私を身ごもった人の部屋に、お連れします。

新共同訳は、「恋い慕う人」を「求める」という恋愛詩として表現しています。今日、雅歌は宗教性をまったく保持しない恋愛歌だと説明する解釈が一般的です。けれども、新訳はあくまで宗教性を重視し、「私の魂の愛する人」を「探す」という訳文にしました。「私の魂の愛する人」（口語訳では「わが魂の愛する人」）の繰り返しを省略せず、原典通りに訳しています。これについては、口語訳に戻ったという印象を持つ人もいます。礼拝で朗読されるに適した訳文にしようとする、確かに口語訳も無視することはできません。この箇所では、「探す」という動詞が4回繰り返され、「見つける（＝見かける）」という動詞は5回繰り返されます。雅歌の著者はいわば言葉の追いかっこをしているのですが、その原文の息遣いをそのまま日本語で表現する努力がされています。ちなみに、新共同訳の「ふしど」（1節）は文語でわかりにくいので、新訳では「寝床」としました。

6. 終わりに

以上、紹介したのは詩文学のほんの一部ですが、聖書協会共同訳がどのような翻訳聖書か多少ともお分かりいただけたのではないのでしょうか。まだ刊行される前ですから、ほんのさわりの「予告編」としてご了解ください。この新しい翻訳聖書は確実に新共同訳を超える、21世紀にふさわしい聖書になるだろうと私は確信しています。それは、ただ単に、これが原典に忠実で信頼できる翻訳というだけでなく、教会の礼拝で厳かに朗読され、大勢の信徒の方々がもっと聖書に親しみ、またその信仰生活が豊かにされるに違いないと思うからです。30年ぶりの新しい翻訳ですが、30年前に刊行された新共同訳に比べて、格段に進歩したことが一つあります。それはコンピューターによる高度な情報処理です。新共同訳では用語の統一が必ずしも徹底されず、あちらこちらにむらがありました。けれども、今回の「聖書協会共同訳」では細部に至るまで徹底されています。もちろん、文脈によって多少の変更はありますが、聖書全体で統一された訳語が選択されています。2016年2月の「キリスト新聞」に、新しい翻訳聖書に対して、①原典に忠実であること、②読みやすいものであること、が期待されるというアンケート結果報告が掲載されていました。その期待に十分応える翻訳聖書が間もなく刊行されます。2018年、新共同訳聖書を超える次世代の翻訳聖書の時代がもうすぐやって来ます。